

アメリカ的世界秩序の分析

西海飛（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：国際政治、アメリカ、戦争、現実主義

序論

私たち日本人にとって戦争といえば過去の出来事であり人々が戦争や平和について考えるのは、せいぜい8月の一時期か「火垂るの墓」がテレビで再放送された時ではないだろうか。NTTが2008年に行った戦争に関するアンケートの中で「終戦の日に家族や友人と戦争の話をしますか？」という問いに対し、「全くない・あまりない」と答えた人の割合は72%であった。終戦の日でこの結果ということは、それ以外の日に人々が戦争について考えることはほぼないと言えるだろう。

1945年の第二次世界大戦終戦から76年経ち、その後続いた冷戦も終結した現在、ほとんどの人が戦争について考える必要がないくらい平和な日々を送っている。その平和を作り上げた戦後唯一の覇権国アメリカの外交政策や、国家的政策に注目し、アメリカを中心とする世界秩序を分析することが本論文の目的である。

第1章 国際連合の成立とそこでのアメリカの働き

第1節 拒否権と国連憲章第51条

アメリカはまず、共和制国家による平和連合の創設を目指して国際連合を設立した。そこでは、大国同士の戦争を防ぐために拒否権が導入された。拒否権は安全弁の役割を果たすことが期待されたものの、自由な武力行使ができなくなるというデメリットもあった。そこでアメリカは自衛のための武力行使、さらにその武力行使を地域的機関が行うことを定めた国連憲章を認めさせた。しかしこれにより、国連による武力介入と地域的機関による武力介入のどちらが優先されるかという問題が生まれた。

第2節 地域的機関と安全保障理事会の関係

この節では、前節で述べた地域的機関と国際連合の武力介入における関係を検討した。ここでは二人の著者の意見を引用し、地域的機関による武力介入の有効性や、紛争と事態を区別することで国際連合と地域的機関の線引きがされるべきとした。この線引きをめぐる論争は冷戦という時代背景があったからこそ展開された議論であり、冷戦終結後にこの問題が提起されることはなかった。

第3節 地域的機関の理想形

この節では、地域的機関のあるべき姿について検討している。最も重要なポイントは、ある域内に存在する大国が外の世界に目を向けるのではなく、地域の内側にある問題の解決を目指し、経済を発展させようとする意思を持つことである。

第2章 冷戦の時代

第1節 冷戦の始まり

アメリカは、共産主義国がその周辺の地域を巻き込んで国家の共産主義化を進めていくというドミノ理論を掲げた。これにより、第二次世界大戦後大きな国力を持っていたソ連に対する限定的な封じ込め政策を、世界中のいかなる国も共産主義から守るという共産主義封じ込め政策に転換した。これにより冷戦時代へ突入することになる。

第2節 ベトナム戦争

アメリカがその歴史の中で、初めて敗北をした戦争がベトナム戦争である。ベトナムの事情を考慮しない一方的な政策が上手くいかず、アメリカ国民がアメリカ的なものへの疑念を抱くようになった。ベトナム戦争後、軍が縮小され、アメリカ国民の対外政策への嫌悪感が増大した。

第3節 SEATOの崩壊

ベトナムと同じく、アメリカによる一方的な押し付けによる政策の失敗例がSEATOである。東南アジア各国が団結して中国の南進を防ぐことにより、アメリカの負担を減らそうという狙いがあったものの、東南アジアという土地への理解の浅さから各国の結びつきがうまくいかないまま、1977年に解体した。

第3章 冷戦の終焉が何をもたらしたか

第1節 「ベトナム症候群」の払拭

ソ連が崩壊し、唯一の覇権国となったアメリカだったが、ベトナム戦争によるトラウマは消えていなかった。このトラウマを払拭するための舞台となったのが湾岸戦争である。ここでは、ベトナムのような長期化を避け、短期集中型の作戦がとられた。勝利を収めたアメリカは、ブッシュ大統領の演説からもわかるようにベトナム戦争のトラウマを乗り越えたかのように思われた。しかし、中東地域での反米感情の高揚や、急進的イスラム主義者の誕生など悪影響もあった。

アメリカ的押し付けが中東でも起こったことは、ベトナム

戦争のトラウマから本当の意味で立ち直ったと言えるのかという疑問を残している。

第2節 デモクラシーの普及という「明白な運命」

アメリカが冷戦を戦った理由は、世界を共産主義から守り、民主主義を広めるためである。ではなぜそのような行動を起こしたのだろうか。それはアメリカの国家的性格が影響していると考えられる。西部開拓時代にキリスト教や自由を布教することが神から与えられた使命だと考えていたアメリカ人は、民主主義についても同じように考えていたのではないだろうか。アメリカ的なものを善と考え、それを普及させようとする姿勢は、建国から受け継がれてきたアメリカ人の特性だと言える。

第3節 孤立主義からの脱却

アメリカは建国当時、ヨーロッパをはじめとする諸外国と不干渉の姿勢（孤立主義）を貫いてきた。しかし、第二次世界大戦や冷戦に参戦し、アメリカの敵となる存在と戦ってきた。冷戦が終結した後、アメリカの脅威と呼べる存在がいなくなったことで、アメリカは孤立主義に立ち返るべきという国内の声もあった。しかし、アメリカはデモクラシーの平和を目指した。カントが平和のためには共和制であることが必要と考えたように、アメリカも民主主義国家間での戦争は起きないことから、デモクラシーを全世界に普及しようとしている。これにより、建国以来の孤立主義から脱却することになった。

第4章 新しい時代における戦争との向き合い方

第1節 コソボ紛争とその問題点

冷戦の東西対立という構図がなくなったあと、アメリカは他国に介入する手段として人道的介入という方法を選んだ。人道的介入の具体例として、1998年から始まったコソボ紛争への NATO の軍事介入が挙げられる。NATO はセルビアによる「民族浄化」を重大な人道上の危機とし、1999年にセルビアの首都であるベオグラードに空爆を行なった。その結果、同年にセルビアは和平案を受諾し、セルビア軍は撤退した。NATO はコソボ紛争において、段階的かつ限定的航空作戦を実行した。これは NATO 域外の主権国家の内政問題について安保理決議のない初めての軍事介入となった。

コソボ紛争の意義は、人権擁護が内戦不干渉の原則に優先することが国際的な場で認められたことである。つまり、これまでよりも他国への介入が容易になり、アメリカの思ったように他国の内政を操るための手段ができてしまったということになる。

第2節 人道的介入と国益の関係

コソボ紛争への介入というのはアメリカにとって大きな意味を持っていた。というのも NATO はセルビアのミロシェヴィッチ統領が空爆開始9日前に拒否したユーゴスラビアの平和を求めるランプイエ合意を、結果として武力によって認めさせる口実ができたからである。コソボ紛争参戦の表向き

の理由は、その地で起きている重大な人権侵害の停止であったが、真の目的は NATO やアメリカの国益を追求するための介入であったのではないかと考えることもできる。

コソボ紛争は人道的介入の危うさを示している。

第3節 現実主義

アメリカがコソボ紛争に介入し、国益を追求していたことから、アメリカの現実主義的側面を窺うことができる。

現実主義とは、自国の利害関心は物質的な国益であり、さらにこれを自由に追求することを正当化するものである。コソボ紛争に続いて人道的危機に陥った東ティモールでは、アメリカは消極的な態度を示し、当該地域中心の関与を求めた。人権侵害が起きていたコソボと東ティモールへの対応の違いの背景には、アメリカの利益になるかどうかがあったのではないか。アメリカのこうした圧倒的な軍事力を武器にした現実主義的政策は、核兵器の前では有効とはいえない。なぜなら、核爆弾一発で一つの国に甚大な被害を与えることができ、そこにはアメリカがこれまで頼りにしてきた軍事力の大きさは関係ないからだ。

現実主義的に自国の国益を追求するための手段は従来のやり方から大きな転換を余儀なくされていると考える。アメリカは、新たな安全保障体制を作り出し、自国の安全と世界の秩序を守ることができるのだろうか。

おわりに

アメリカはこれまでに多くの戦争を戦い、平和とはかけ離れた政策をとってきたように見えるかもしれない。しかし、全ての戦争相手国は非民主主義国家であり、それゆえすべての戦争は平和を求めるための戦争であるということができる。

アメリカ的世界秩序はアメリカの強さを生かしたパワーによって形成されている。しかしながら、現在まで続くこの構造がこれからの世界において同じく有効であるというのは難しい。なぜなら、第4章3節でも述べたように核兵器という国家間の力関係を一発でひっくり返してしまう兵器が世界中に存在しているからである。そのために、アメリカはこれまでの方法とは違う新たな国際秩序形成の方法を探らなければいけない。

主な参考文献

- 北村治「アメリカのデモクラシーと戦争-冷戦後のアメリカ外交の思想的基盤-」,日本国際政治学会編『国際政治』第150号,2007年,52-65頁。
- 松本雅和『平和主義とは何か 戦争哲学で考える戦争と平和』,2013年,中公新書。
- 松岡完『ベトナム症候群 超大国を苛む「勝利」への強迫観念』,中公新書,2003年。
- 松岡完『ベトナム戦争 誤算と誤解の戦場』,中公新書,2001年。